

大学生が受けてきた性教育の現状と課題

－性教育の内容－

四宮 美佐恵¹⁾*・安田 陽子¹⁾・百田 由希子¹⁾・金山 時恵²⁾

1) 新見公立大学助産学専攻科 2) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2018年11月21日受理)

本研究は、大学生が今までに受けてきた性教育の内容を明らかにし、今後の性教育のあり方の示唆を得ることを目的とした。2016年と2017年5月にA大学看護学部2年生130名を対象に、研究の概要を文書と口頭で説明し、研究協力の承諾を得た。「今までに受けた記憶に残る性教育の内容」について自由記述した内容を質的記述的に分析した。性教育の内容は、《自分の誕生》《生命の誕生の仕組みと過程》《思春期における心と身体の変化》《性の自己認識と性差》《性行動によって生じるリスク》《医師・助産師の講演》《妊婦・子育て体験》の7つのカテゴリーが抽出された。大学生は、発達段階を踏まえた、心身の発育・発達と健康に関する知識を身に付け、生命の尊重、性行動のあり方について学んでいた。今後は、科学的な性の知識を身に付け、関係性の性、人権としての性、性への態度を考えることを通して、自らの意思決定と健康的な行動の必要性の理解を深める教育が必要であることが示唆された。

(キーワード) 大学生、性教育、健康教育

はじめに

人は生まれた瞬間から生涯にわたり、性と向き合って生きていかなければならない。人間の性は、その人のパーソナリティーの中心的な部分に組み込まれている基本的な条件であるため、その人が男性か、女性か、また、それに対する認識は、人生観や思考、行動、友人の選択、服装、態度など様々なものに違いが生じる。つまり、人間の生涯を通じての生き方そのものまで左右される。しかも、「人間の性」に関する条件付けは、幼児から成人に至る成長の過程で、家庭や学校、社会における様々な人間関係によってもたらされるものである。この事より、性は人格の形成や人生設計にまで影響を及ぼすため、生まれた時から性教育がはじまり、発達段階に応じて行っていく必要がある。

学校における性教育は、児童生徒の人格と豊かな人間形成を究極の目的とし、生命尊重、人間尊重、男女平等の精神に基づく正しい異性観をもつことによって、自ら考え、判断し、意思決定する能力を身に付け、望ましい行動をとれることを目的としている¹⁾。さらに、新学習指導要領では、子どもの発達の段階を踏まえ、心身の発育・発達と健康、性感染症の予防などに関する知識を確実に身に付けること、生命の尊重や自己および他者の個性を尊重するとともに、相手を思いやり、望ましい人間関係を構築することなどを重視し、相互に関連づけて指導することが盛り込まれた²⁾。このような性教育の取り組みの中、大学生は、性

教育を受けたという実感がなく、何を学んだのかもはっきりしていない状況があるものと思われる。また、大学生を対象として、過去にどのような性教育を受け、記憶に残っている内容がどのようなものなのかを明らかにしている研究は少ない。我々は、2016年に看護大学生65名を対象に記憶に残る性教育について調査を行ったが、対象者数が少なく信用性、妥当性が十分ではないと考え、今回、対象者数を増やして調査を行った。本研究の目的は、大学生が受けてきた性教育の現状を明らかにし、今後の性教育のあり方の示唆を得ることとした。

1. 研究方法

1. 研究デザイン
質的記述的研究

2. 対象者

A大学健康科学部看護学科2016年度2年生、2017年度2年生、計130名を対象とした。

3. 調査期間

2016年、2017年の5月に実施した。

4. 調査方法

母性看護学概論の講義時に、レポート課題として「看護大学入学までに受けた記憶に残る性教育の内容」を記述することを説明し、講義終了時に回収した。講義出席者全員に提出を求め、レポート提出時は記名であったが、研究に

*連絡先：四宮美佐恵 新見公立大学助産学専攻科 718-8585 新見市西方1263-2

用いるために個人名を破棄した。

5. 分析方法

大学生が自由記述した性教育の内容をコード化し、コードの類似性に基づき、サブカテゴリーを構成し、カテゴリー化を行った。分析過程において、助産学・看護学の研究者と検討を行い、信用性・妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

研究の主旨、目的、方法、結果の公表についてと、研究協力は自由意思であり内容が成績に影響しないこと、協力しなくても不利益を被らないこと、同意後でも随時協力を撤回できること、個人情報保護に関することを口頭と文章で説明し、同意書への署名を受けて同意を得た。なお、新見公立大学倫理審査委員会で審査・承認(134号)を得て実施した。

II. 結果

1. 対象者の属性

A大学看護学科2年生130名

2. 過去に受けた記憶に残る性教育の内容

性教育の内容を分析し、抽出されたコードは250であり、コードの類似している内容を12のサブカテゴリーに分類した。さらに、〔自分が産まれてきた時の事〕からなる【自分の誕生】、〔生命の誕生の仕組みと過程〕〔生命のはじまり〕からなる【生命の誕生の仕組みと過程】、〔初潮教育〕〔男女の生殖器の構造の違い〕からなる【思春期における心と身体の変化】、〔ジェンダーと性同一性障害〕〔男女における性差〕からなる【性の自己認識と性差】、〔性感染症予防〕〔性行為〕〔避妊と人工妊娠中絶〕からなる【性行動によって生じるリスク】、【医師・助産師の講演】、【妊婦・子育て体験】の7つのカテゴリーが抽出された(表1)。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〔〕、コードを<>で示す。

1) 自分の誕生

【自分の誕生】は〔自分が産まれてきた時の事〕の1つのサブカテゴリーで構成した。〔自分が産まれてきた時の事〕では<自分の名前の由来><自分が産まれた時のエピソードを親に聞く><自分の生い立ちについて><小学生になるまでの話を聞いてくる>等であった。

2) 生命の誕生の仕組みと過程

【生命の誕生の仕組みと過程】は〔生命の誕生の仕組みと過程〕と〔命のはじまり〕の2つのサブカテゴリーで構成した。〔生命の誕生の仕組みと過程〕では<妊娠・出産に至る仕組み><人間の誕生の仕組み><受精の仕組みから出産までの過程><出産のときの映像を見た><命がどれだけ素晴らしいか>等であった。〔命のはじまり〕では<種の保存><どのように受精し受精卵が胎児に成長していくか><胎児の成長について>等であった。

3) 思春期に向けての心と身体の変化

【思春期に向けての心と身体の変化】は〔初潮教育〕と〔男女の生殖器の構造の違いを知る〕の2つのサブカテゴリーで構成した。〔初潮教育〕では<ナプキンの使い方や女の子であるがための使命、母親になるための準備><女子だけ教室に集まって月経についての話><生理が起こる仕組み><修学旅行に行く前にナプキンの付け方を教わった><中学の保健の授業で月経や精通について学ぶ>等であった。〔男女の生殖器の構造の違いを知る〕では<男性と女性の身体の違い><お風呂での身体の洗い方やトイレでの拭き方><女性生殖器・男性生殖器の形や機能><思春期における男女の身体の違い><男女の身体機能の働きの違い、命が誕生するまでの細胞の形成><第二次性徴における身体の変化><男女の気持ちの違い><男女の性の特徴>等であった。

4) 性の自己認識と性差

【性の自己認識と性差】は〔ジェンダーと性同一性障害〕と〔男女における性差〕の2つのサブカテゴリーで構成した。〔ジェンダーと性同一性障害〕では<道徳の授業でジェンダー等を習った><男女共同参画社会基本法について><トランスジェンダーと性同一性障害の疑いについて><性犯罪や性同一性障害について><性同一性障害や同性愛などがあり差別をうけやすい>等であった。〔男女における性差〕では<男女差別について><女性差別の歴史>等であった。

5) 性行動によって生じるリスク

【性行動によって生じるリスク】は〔性感染症の予防〕と〔性行為〕と〔避妊と人工妊娠中絶〕の3つのサブカテゴリーで構成した。〔性感染症の予防〕では<セックスすることで病気に感染する危険性があること><エイズなどについて><HIVなどの性感染症の予防などを聞いた><性病の恐ろしさやどういった感染ルートで性病に感染するか>等であった。〔性行為〕では<性行為の時に気をつけること><性行為の時のエチケット>等であった。〔避妊と人工妊娠中絶〕では<中絶と命の大切さ><避妊は絶対ではない、望まない妊娠の可能性をつくるな><望まない妊娠や中絶の恐ろしさ><避妊方法>等であった。

6) 医師・助産師の講演

【医師・助産師の講演】は〔医師・助産師の講演〕の1つのサブカテゴリーであった。〔医師・助産師の講演〕では<産婦人科の医師の話聞く><助産師による性教育講演会><助産師による命のつなぎ方の講演>等であった。

7) 妊婦・子育て体験

【妊婦・子育て体験】は〔妊婦・子育て体験〕の1つのサブカテゴリーであった。〔妊婦・子育て体験〕では<赤ちゃん和交流して赤ちゃんの存在について学んだ><赤ちゃんと同じ体重の人形を抱く><妊婦を体験する>等であった。

大学生が受けてきた性教育の現状と課題

表 1. 性教育の内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
自分の誕生	自分が生まれてきた時の事	・自分の名前の由来
		・自分が生まれた時のエピソードを親に聞く ・小学生になるまでの話を聞く
生命の誕生の仕組みと過程	生命の誕生の仕組みと過程	・妊娠・出産に至る仕組み ・人間の誕生の仕組み ・受精の仕組みから出産までの過程
	生命のはじまり	・種の保存 ・胎児の成長について
思春期における心と身体の変化	初潮教育	・生理が起こる仕組み
	男女の生殖器の構造の違い	・女の子であるがための使命、母親になるための準備 ・男性と女性の身体の違い ・男女の性の特徴
性の自己認識と性差	ジェンダーと性同一性障害	・男女共同参画社会基本法について ・性同一性障害や同性愛などがあり差別をうけやすい
	男女における性差	・男女差別について ・女性差別の歴史
性行動によって生じるリスク	性感染症の予防法	・性感染症の予防法 ・エイズについて
	性行為	・セックスすることで病気に感染する危険性があること ・性病の恐さやどういった感染ルートで性病に感染するか ・性行為の時に気を付けること ・性行為の時のエチケット
	避妊と人工妊娠中絶	・避妊方法 ・避妊は絶対ではない、望まない妊娠の可能性はつくるな ・中絶と命の大切さ
医師・助産師の講演	医師・助産師の講演	・産婦人科の医師の話聞く ・助産師による命のつなぎ方の講演
妊婦・子育て体験	妊婦・子育て体験	・妊婦体験ジャケット着用 ・赤ちゃんとの交流

III. 考察

大学生が過去に受けた記憶に残る性教育の内容は【自分の誕生】【生命の誕生の仕組みと過程】【思春期における心と身体の変化】【性の自己認識と性差】【性行動によって生じるリスク】【医師・助産師の講演】【妊婦・子育て体験】の7つのカテゴリーが抽出された。これらの内容を基に、大学生に必要な性教育に関する健康教育のあり方を考察した。

1. 大学生が過去に受けた性教育の現状

中央教育審議会の答申(2008年1月)では、学校教育において、何より子ども達の心身の調和的発達を重視する必要がある、そのためには、心身の成長発達について正しく理解することを不可欠としている。そして、性情報氾濫などの社会環境の大きな変化、若年層のAIDSおよび性感染症や人工妊娠中絶の問題から、特に子どもたちが性に関して適切に行動できる必要性を指摘している³⁾。

そこで新学習指導要領では、子どもの発達段階を踏まえ、心身の発育・発達と健康、性感染症の予防などに関する知識を確実に身につけること、生命の尊重や自己および他者の個性を尊重するとともに、相手を思いやり、望ましい人間関係を構築するなどを重視し、相互に関連づけて指

導することが盛り込まれた⁴⁾。

人は生まれた瞬間から生涯にわたり自分の性と向き合っていかなければならない。人間の性は人格の形成や人生の設計にまで影響を及ぼすものであるため、生まれた時から性教育が始まり、発達段階に応じて行っていく必要がある。そして、性教育を最初に行うのは両親である。両親や周りの家族との基本的信頼感を育み、愛着が形成されることによって、命の大切さを知り、人を愛することを学んでいくことができる。大学生が過去に受けた性教育の内容の【自分の誕生】では、<自分の名前の由来>や<自分が生まれた時のエピソードを親に聞く>など、[自分が生まれてきた時の事]を両親から聞くことで、自分が両親に愛されていることを知り、自分の存在も肯定できる。また、【生命の誕生の仕組みと過程】で、<人間の誕生の仕組み>や<命の始まり>について学ぶことで、命の大切さを知り、自分や自分以外の人の生命を尊重することができる。

現在は、二次性徴の始まりが早くなり、心の発達が未熟な状態で二次性徴に対応しなければならず、身体は性的に成熟していくのに、心は子どもの状態であることが多い。

【思春期に向けての心と身体の変化】の、<初潮教育>では、思春期を迎える前に、今後自分自身の心と身体にどのような変化が起こってくるのかを知っておくことで、その

変化に対応できるような準備をする必要がある。特に、初経発来前の月経に対する教育は、月経についての正しい知識を得ることにより、突然生じる初経に対する精神的動揺を少なくするためのものである。また、初経を迎えたことで「自分が望むならば母親になることができる」といった自己実現の視点から教育することも重要であると考えられる。これまで性教育は、月経教育から女性の性について学ぶイメージが強かったが、両性の共生関係を育てるうえで「男性が性を学ぶ」大切さが指摘されている。特に、男性の性の学習課題として性の相互性、コミュニケーションとしての性という観点が重要であるといわれている⁵⁾。

【性の自己認識と性差】の、〔ジェンダーと性同一性障害〕では、近年新たに注目されていることであり、人間の性（セクシュアリティ）を人権として認め、他者の性的人権も自らと同じように尊重する姿勢を養うことが求められると推察する。〔男女における性差〕では、＜男女差別について＞＜女性差別の歴史＞について学んでいた。力により他者を支配・服従させたり、相手との合意のない振る舞いはしないこと、セクシュアルマイノリティに対する差別や偏見を無くするような性と人権に関する性教育も必要になってくる。そして、人権に基づく価値観で、礼儀正しく公平な人間関係を促進するような性別役割の発達を育てることも必要であると考えられる。また、これまで性被害に関しては、性教育で取り上げられることはほとんどなかったが、あらゆる教育の場で性被害が起きていることから、セクシュアルハラスメントについての理解を深めていくことも必要であると考えられる。

学校における性教育として様々な取り組みがなされているが、性感染症に対する若者の危機感や予防に関する知識は依然として低く、性教育の効果が十分でない現状がある。今回の調査においても、【性行動によって生じるリスク】では〔性感染症の予防〕〔性行為〕〔避妊と人工妊娠中絶〕について学んでいたが、十分であったかどうかは計り知れない。しかし、性感染症予防に関しては、責任ある決定ができるような教育が必要ではないかと考える。

【妊婦・子育て体験】では、子育ては単なる知識や技術の有無ではない。堤は「男女ともに親性が関係してくる。人は子どもを持った時点から親になるのではなく、実際に自身の子どもを持つ以前から親になるための準備（親性準備性）がなされる。この親性準備性の心理的な関連要因には、父母との同一化、自己の性の受容、異性との親密性などがあげられる」と述べている⁶⁾。児童虐待や、親になりきれない親の増加の要因に、身体的生殖能力に、自我発達が追いつかない状況で親になってしまうことがあげられる。

2. 大学生に必要な性教育に関する健康教育のあり方と課題
性に関する健康教育としての具体的な内容について、桑名は、「『科学的な性の知識』（自らの性の理解、性差・異性の理解、妊娠・出産・不妊など）、とともに、「関係

性としての性」（対等性、自己肯定感、安心感、コミュニケーション力など）、「人権としての性」（性差別、性暴力、障害者の性、性の多様性など）、さらに「性への態度」（性の文化、性別役割の課題、社会・歴史との関連など）を考えることを通して自らの意思決定（性の自己選択・自己決定）と健康的な行動（性への接近、避妊、性感染症の予防、性の自己管理など）の必要性への理解を深めることである。』と示している⁷⁾。そのことをふまえて、本研究の大学生が今までに受けてきた性教育の内容を見ると、「科学的な性の知識」については、「生命の誕生の仕組みと過程」〔生命のはじまり〕、「男女の生殖器の構造の違い」等で学び、「関係性としての性」「人権としての性」「性への態度」については、「ジェンダーと性同一性障害」〔男女における性差〕〔性感染症予防〕〔性行為〕〔避妊と人工妊娠中絶〕等で学んでいた。文部科学省の高等学校学習指導要領解説では、性教育について『高校生が記憶している内容は、「妊娠のしくみ」と「HIV/AIDS」は80%を超えているものの、性行動や性交に伴う諸問題（妊娠、人工妊娠中絶、性感染症など）、性の社会的・心理的側面にかかわる内容（男女平等問題、セクハラ・性暴力の問題、性的マイノリティなど）については十分とはいえないともいわれている。』との報告がある⁸⁾。

性感染症については、できる限り詳しく学ばせ、健康に生きていく上でとても大切な知識であり、責任ある決定が求められることを伝えることが必要であると考えられる。また、近年、十代の人工妊娠中絶が増加し、社会問題になってきている現状の中で、学校の性教育への期待は大きい。村瀬は「避妊も中絶も暴力も育児もいずれも＜共生＞のあり方を問う問題です。＜共生のあり方を問う学習＞は性の学習全体にひろがる課題である」⁹⁾と述べている。現在の子どもたちは、多くの人たちと人間関係を育てていく経験が乏しいため、自分の考えを伝えたり、相手の気持ちを考えて行動することができず、自分以外の人と共に生きていくことが困難になっている。そこで、単なる二人の関係をこえた人間関係の絆や情緒的な面の価値を高めるような教育が必要であると考えられる。

また、大石は「平等な関係性がなければ性感染症も望まない妊娠も防ぐことは難しい」こと、また、「男女がそれぞれ独立した人格として意思決定をし、お互いがその意思を尊重し合って関係性を築いていくことを筆者は性教育の目標としている」¹⁰⁾と述べているように、性教育の中で共生のあり方や平等な関係性を考える教育も必要ではないかと考える。

WHOは、「人々のセクシュアルヘルスを促進するためには、包括的な性教育を広く提供することが重要であるとしている。包括的性教育とは、WHOの目標に示されているように知識を修得するだけでなく、態度や価値観、関係性のあり方などを含め教育することである。」と示している¹¹⁾。

以上のことより、大学生に必要な性教育に関する健康教育のあり方は、性に関する知識を習得するだけでなく、態度や価値観、関係性のあり方などを含めて、望まない妊娠や性感染症、HIV/AIDSの予防として個人の自己決定権、男女平等、性の多様性を尊重した包括的な性教育が必要であると考える。

本研究は、1大学での調査である為一般化することはできないが、過去に受けた性教育の内容を基に、今後は、大学生がどのような性教育を求めているのかを調査し、大学生が求める性教育を検討し、健康教育として実施することを課題としたい。

IV. 結論

大学生が過去に受けた記憶に残る性教育の内容は【自分の誕生】【生命の誕生の仕組みと過程】【思春期における心と身体の変化】【性の自己認識と性差】【性行動によって生じるリスク】【医師・助産師の講演】【妊婦・子育て体験】の7つのカテゴリーが抽出され、発達段階を踏まえた、心身の発育・発達と健康に関する知識を身に付け、生命の尊重、性行動のあり方について学んでいることが明らかになった。今後、大学生に必要な性教育に関する健康教育のあり方は、性に関する知識を習得するだけでなく、態度や価値観、関係性のあり方などを含めて、望まない妊娠や性感染症、HIV/AIDSの予防として個人の自己決定権、男女平等、性の多様性を尊重、健康的な行動の必要性の理解を深めるなど、包括的な性教育が必要であることが示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、アンケートにご協力くださいました看護大学生の皆様は心より感謝いたします。

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

V. 献

- 1) 文部科学省：学校における性教育の考え方、進め方、第7版、ぎょうせい、1-48、2006。
- 2) 文部科学省：学校教育全体で取り組むべき課題と学習指導要領等の内容、(2017年2月)、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/022/siryo/06092114/001/004/003.htm
- 3) 文部科学省：中央教育審議会答申、(2017年2月)、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/index.ht
- 4) 東洋館出版社編集部編：「小学校」新学習指導要領ポイント総整理、何がどのように変わったのかが一目でわ

- かる、東洋館出版社、235、2008。
- 5) 川島広江：助産師のための性教育実践ガイド、現代社会において助産師が性教育をになうということ、医学書院、2-17、2005。
 - 6) 堤治、高橋眞理：系統看護学講座、専門分野Ⅱ、母性看護学概論、母性看護学①、医学書院、140-141、2016。
 - 7) 桑名佳代子：健康教育としての性教育、女性の健康とケア、日本看護協会出版会、300-327、2016。
 - 8) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説、保健体育編・体育編、東山書房、京都、61、2009。
 - 9) 村瀬幸浩、川島広江：助産師のための性教育実践ガイド、性教育で押さえておきたい大切なこと、医学書院、東京、72-74、2005。
 - 10) 大石時子、川島広江：助産師のための性教育実践ガイド、性の自己決定権とジェンダー、医学書院、19-26、2005。
 - 11) 高橋眞理、工藤美子：系統看護学講座、専門分野Ⅱ、母性看護学概論、母性看護学①、医学書院：203-204、2016。
 - 12) 青根千春：高等学校養護教諭が感じている性教育に関する困難感と今後の課題、群馬大学教育学部紀要、芸術・技術・体育・生活科学51:67-76、2016。
 - 13) 忠津佐知代：大学生の性に関する知識の実態とピアカウンセリングへの期待-ピアによる性教育ニーズと教育内容の検討-、川崎医療福祉学会誌、17(2)、313-331、2016。
 - 14) 岡部恵子：高等学校における性教育の現状と課題-大学1年次生の認識調査をもとにして-、埼玉医科大学雑誌、35(1)、69-73、2008。
 - 15) 安武繁：学校保健と地域保健が連携した「生と性の健康教育」推進システムの構築に関する研究、人間と科学、県立広島大学、保健福祉学部誌、6(1)、83-90、2006。
 - 16) 大橋裕子：性教育の実践に関する文献検討、生命健康科学研究会紀要、創刊号:43-49、2005。
 - 17) 野崎健太郎、林里奈：アンケート調査による日本の性教育の実態と問題点の解析(予報)、相山女学園大学研究論集、39、187-196、2008。
 - 18) 四宮美佐恵、金山時恵、安田陽子他：看護大学生の記憶に残る性教育の一考察、岡山県看護教育研究誌、41(1)、45-52、2017。

**The current status and issues regarding sex education that college students have received
-Content of sex education-**

Misae SHINOMIYA¹⁾, Yoko YASUDA¹⁾, Yukiko HYAKUTA¹⁾, Tokie KANAYAMA²⁾

1) Niimi College Postgraduate Course in Midwifery 1263-2 Nisigata, Niimi Okayama,718-8585,Japan

2) Niimi College Faculty of Human Health Sciences Department of Nursing 1263-2 Nisigata, NiimiOkayama,718-8585,Japan

Summary

[Purpose] To investigate sex education that college students have received, and obtain suggestions for how to provide sex education in the future. [Methods] The study outline was explained in both oral and written forms to 130 second-year nursing students from a college, and consent was obtained prior to the study. Their open text responses regarding “memorable sex education lessons they received” were analyzed using a qualitative and descriptive approach. [Ethical considerations] This study was conducted with the approval of the ethics committee of the research director’s institutions. [Results] As a result of analysis, the following 7 categories were extracted: <My birth>, <mechanism and process of the birth of life>, <changes in mind and body during adolescence>, <self-perception of sex and gender difference>, <risks arising from sexual practices>, <lecture by physicians and midwives>, and <pregnancy and child raising simulation>. [Discussion] Sex education had provided the students with knowledge on mental / physical health and growth based on the stages of development, and helped them learn respect for life and sexual activities. The results indicate the need to promote scientific knowledge on sex, and to deepen understanding of the need to make their own decisions and pursue healthy activities through examination of sex in relationships, sex as human rights, and attitude toward sex.

Keywords: college student, sex education, health education